

# 日本ボストン会会報

発行所 日本ボストン会事務局

## 会長就任に当たって

会長 鶴正登

昨年11月の総会におきまして第8代会長に就任いたしました鶴でございます。新年のご挨拶を兼ねまして会員の皆様に改めてご挨拶申し上げます。

第5代会長の茂木賢三郎様から日本ボストン会への入会のお誘いと、併せて会長就任の要請を受けました。新会員でいきなり会長ということではよろしいのでしょうか？とお聞きしましたが、3回に1回はハーバード関係者が会長になるのが慣例とのこと。茂木様とはハーバード・ビジネス・スクールの同窓生として前からお付き合い・ご指導を頂いており、その縁でのご推薦と思いお引受けをいたしました。また会の運営については副会長や幹事の皆さんが熱心に推進してくれるので何も心配はしなくてよいとお話でした。昨年以来幹事会・総会に出席して、正にその通りであることを強く感じております。従って総会での挨拶も「会長としての私の役割は、会員の増強と慣例に則って次々期会長を探すことですね」と冗談半分ではありますが申しました。

私は1973年に結婚し、直ちに社命でアメリカの関係会社勤務となりました。最初の勤務地はニューハンプシャー州。60万人程度しか住んでいない小さな州で、日本の友人に話しても「豚で有名なイギリスの町じゃなかったけ？」などと言われる始末でした。私たちが住んだマンチェスター市は人口約10万人の州最大の町でしたが、日本人は近郊を含めてもアメリカ軍人に嫁いだ女性が数人いるだけ。言葉や自動車運転に不慣れな家内が特に初めは苦労しました。日本食料品も月に1回程度ボストンまで車で1時間走って、確か「吉野屋」という店へ買いに行きました。

その後マサチューセッツ州ベッドフォードにある別の会社に転じ、更にその後2年間ハーバード・ビジネス・スクールで勉強。それに伴い、



バーリントン、アーリントン、レキシントンと転居を重ね、1977年に帰国するまで約4年間ニューイングランドで暮らしました。結婚生活を始めた土地であり、加えてマンチェスターでは長女も生まれており、家内共々ニューイングランド・ボストンが大好きです。

地元のスポーツチームの活躍は今でも気になりますし、特に当時弱小チームであったペイトリオッツの近年の躍進は嬉しい限りです。家内はボストンシンフォニーやボストンポップスの演奏会にも行きましたし、二人で当時人気のあったトニー・オーランド & ドーンを聴きにボストンガーデンに行ったり、遠くロードアイランド州プロビデンスまでフランク・シナトラのコンサートに行ったりしてアメリカ生活を楽しましました。秋のメイン州・ニューハンプシャー州の紅葉も忘れられません。

また、今年は松坂大輔投手のボストン・レッドソックス入りが実現し、ますます、日本とボストンの関係が身近に感じられることが多くなると思います。

長々と個人の思い出話を語りご迷惑だったかもしれませんが、「好きこそもの上手なれ」。大好きなボストンを愛する人の集まりである日本ボストン会の発展に少しでも貢献したいと思います。

### 日本ボストン会 今年の予定

- |                         |    |                        |
|-------------------------|----|------------------------|
| * 3月24日(土) 観桜会          | 2頁 | * ハイキング・山の会 (時期 未定)    |
| * 3月24日(土) 桜景色をスケッチする会  | 2頁 | * ゴルフの会 (秋 未定)         |
| * 4月27日(金) ゴルフの会        | 2頁 | * 11月9日(金) 総会・懇親会(予定)  |
| * 5月24・25日(木～金) 歴史・美術の会 |    | * 11月下旬/12月初旬 紅葉狩り(予定) |
| 合同企画「大津湖都 古社寺めぐり」3頁     |    |                        |

## 日本ボストン会観桜会

2007年のお花見は、昨年と同じ千鳥が淵において開催いたします。今年は桜の開花が早まると見られておりますので、3月24日に開催します。

下記の要領にて開催いたしますので、奮ってご参加願います。準備の都合がありますので、申込み締切りを3月17日にさせていただきます。

集合場所： 三井アーバンマンション（旧フェアモントホテル）前、ボート乗り場付近（地下鉄「九段下」駅下車、2番出口から徒歩10分）。

集合時間： 3月24日（土）午後5時30分（幹事は5時50分まで待ちます）。

散策ルート： 千鳥が淵⇒靖国神社⇒武道館前。（散策約1時間）。

宴会場： 九段会館（午後6時半から）  
千代田区九段南1-6-5  
☎03-3261-5521

費用（予定）：7000円／一人  
会費は事前納入を原則とします。

費用振込先：

申込先： 生田英機

## 桜景色をスケッチする会 開催案内

「油彩・水彩を描く会」が「観桜会」（別項参照）の開催日に、水彩・鉛筆など手軽な画材でスケッチする催しを企画しました。同好の方は午後2時30分に東京国立近代美術館入口前へお集まり下さい。なおご参加希望の方は幹事宛にご一報下さい。

幹事： 西川文夫

藤盛富美子

## 春季ゴルフコンペのご案内

日本ボストン会の春季ゴルフコンペを下記の通り開催いたします。

今回は出来るだけ多くの方々が、参加しやすいように、先日の幹事会で検討し、川崎国際ゴルフ場で開催することにしました。

パブリックコースであるため、予約の電話を50数分間、ダイヤルし続けることになりましたが、

1. 日時 4月27日（金）午前10時18分イコース スタート
2. 集合時間： 現地 午前9時45分
3. 最寄の鉄道駅： 小田急線 向ヶ丘遊園駅下車  
タクシーで約10分、又は専修  
大学行きのバスにて終点で下車。
4. 会費： 4000円（賞品、パーティー代）
5. プレー代： このコースはクレジットカードの支払いはできません。チェックインの時各自現金にてお支払いください。

尚、今回は4組予約しております。どしどしご参加下さるようお願いいたします。

幹事としましては、今回は晴天でプレーできることを祈っております。（注 前回は雨天中止）

幹事連絡先：

山崎 恒

（続報）

お蔭様で、16名の方々から申込みがあり、久しぶりに、賑やかなコンペが開催出来ることを喜んでおります。ありがとうございます。

## お元気な山田敬蔵さん

昨年10月30日、79歳になられた山田敬蔵さんは今なお、隔日20キロのマラソンを継続されておられ、お元気で総会にご参加をいただきました。

ボストン・マラソンにも現在、毎年参加されておられ、80歳まであと2年は参加されるべく、毎月、各地のマラソン大会に参加されておられます。

昨今、高齢者の健康維持が話題になっていますが、生活の目標を持ち、日頃の生活の中で適切な身体のトレーニング、呼吸法、食事・水分の摂取、筋力の維持に留意されれば、80歳でも42キロのマラソン・レースに参加できることを実証されようとしています。これからも我々の先達として、ご活躍されることを願っております。（俣野善彦記）

歴史を飲もう会、美術の会、合同開催ご案内

大津—湖都の路(新緑の古社寺めぐり)

日程: 2007年5月24日(木)~25日(金) 1泊2日

見学コース: 1日目 石山寺、琵琶湖疎水、三井寺、大津市歴史博物館、法明院、フェノロサの墓。

2日目 比叡山延暦寺(東塔、比叡山国宝殿、西塔)。

宿泊: 琵琶湖ホテル(☎077-524-7111)  
(eメール [www.biwakohotel.co.jp/](http://www.biwakohotel.co.jp/))

交通: (往) JR(新幹線)のぞみ63号、 (復) JR(新幹線)のぞみ92号。  
東京駅(発) 8:33 京都駅(発) 15:26  
新横浜駅(発) 8:50 新横浜駅(着) 17:30  
京都駅(着) 10:53 東京駅(着) 17:46  
京都駅(発) 11:00 (JR東海道本線)  
石山駅(着) 11:12  
(徒歩連絡2分)  
京阪石山駅(発) 11:21 (京阪石坂線)  
石山寺駅(着) 11:24

集合時間: 京阪石坂線 石山駅 改札口付近: 11:30

費用(概算): 通常期 JRとホテル(朝食付)のセット料金 39,000円  
(注 往復共 のぞみ利用)  
JRとホテル以外の交通費+拝観料金 4,510円  
夕食、昼食費を含めて1人 約5万~6万円

世話役: 篠崎 史朗  
三好 彰  
酒井 一郎  
3者共通eメールアドレス:

参加申込: 上記世話役にeメール、又は電話で3月21日(水)までに連絡願います。  
ホテル予約の都合上、参加申込みと同時に下記の参加方法について選択の上、ご連絡願います。(注 JRセットプラン、又はJRチケットは、各自でご購入をお願い致します。)  
① JR+ホテルのJRセットプランを利用の方。(購入方法は別途お知らせします)  
② ホテルの予約のみの方(セットプランを利用しない方)。  
③ その他の方(日帰りなどの場合)。

日本ボストン会では隔年で名古屋ボストン美術館を訪ねることにしておりましたが、フェノロサやビゲローに縁の深い三井寺(法明院)まで足を伸ばしたいと予めから考えておりました。今回はフェノロサ研究の第一人者でおられる山口静一先生もご都合がつけばご参加のご意向です。お申込みをお待ちしております。世話役

## 2006年紅葉狩りの会

今年が3回目となった紅葉狩りは、好天に恵まれた11月3日(金)、東京都民にとり身近な秋の奥多摩を訪ねることになった。

JR新宿駅を午前8時47分に出るホリデー快速「おくとま・あきがわ号」5号に乗車すると、途中、中野・三鷹・国分寺・立川・西立川に停車するだけで、拜島には午前9時25分に到着した。ここで、列車は青梅線の最終駅「奥多摩」には進行方向の先頭から6両と、五日市線の「五日市」に向かう後部の4両車両に分けられた。

われわれの目的地である「御嶽(みたけ)」駅には、午前10時7分に到着した。新宿からの所要時間は1時間20分であった。列車には多くの乗り越し客が多く、駅の改札を出るのにも随分時間がかかったが、集合時間は午前11時であったので、それまで駅前を散策して全員の到着を待った。

奥多摩は「東京のふるさと」として都民に親しまれ、青梅・五日市線の沿線には数多いハイキングの好適地が多く、列車もハイキング客で混雑していた。

駅前には小さな露店が店開きして、近隣でとれた山菜、木の実、野菜、漬物やまんじゅう、お団子が売られ、奥多摩(奥多摩と山梨を含む)の東京シティ・ガイド(観光財団)の名札をつけてプロと自称するボランティアが駅周辺の登山・レジャー・観光施設の案内をしてくれていた。

今年は暖冬のために紅葉が遅れ、駅前から遙か遠くに見える御岳山の武蔵御嶽神社宝物殿付近が僅かに色づく程度であった。

当日の参加者は19名、午前11時過ぎには全員の到着が確認され、みたけ駅前の青梅街道を横切り、御岳橋を渡って突き当たる吉野街道を左に曲がって約10分で玉堂美術館に到着、正午まで日本画壇の巨匠・川合玉堂の作品を鑑賞した。

美術館には玉堂16歳の折りに描かれた花鳥の実に細かな筆遣いが判る写生が展示されており、若い時からの画才が示されていた。展示作品は84歳の絶筆まで幅広く網羅されており、画室もそのままに作られていて、往時を偲ぶことができた。

正午に美術館前の入口の階段を利用した記念撮影を済ませ、午後2時の「ままごと屋」の会食時間まで、目的地別に小澤酒造(株)の酒蔵見物、スケッチ、御岳美術館と3班のグループに別れて散った。

御岳美術館を目指す組は駅から来た道を戻り、駅前で青梅街道を左に曲がり、しばしなだらかな道を登ってから、御岳美術館の標識に従って左に別れた

小道を下って多摩川べりに出たところに架けられた神道橋を渡らずに、川の上流に向けて川沿いの御岳溪谷遊歩道[みたけ歩楽里道(ぶらりどう)]をしばし歩き、美術館に到着した。みたけ駅前から20分の行程であった。

美術館は「たましん歴史・美術館分館」として経営され、毎年4月11日を桜の日、8月21日を倉田三郎生誕記念日、11月3日を開館記念日として『スケッチの日』に定め、美術館入場者に画材を無料で貸出し、スケッチを勧めている。我々が訪れた日も、2階のテラスを提供してこのサービスを受けた数組の親子連れがスケッチを楽しんでいた。更に当日の来館者には記念品(3Bの館名入りの鉛筆)がプレゼントされた。

美術館は一階のエントランス・ホール、二階の第1、第2展示室に約40点の展示品が置かれ、著名な日本人芸術家の陶芸、彫刻、絵画の他、倉田三郎記念室にはスペインを描くスケッチ20点の作品が展示されていた。これからスケッチを学ぶ人には参考になる作品の数々であった。二階には上野の国立西洋美術館の野外に置かれたA.ロダンの「カレーの市民」の小さな第1試作品も展示されていた。たまたま10月21日に上野で等身大の6人の大きな彫刻を見てきたばかりに大変に強い印象を受けた。

御岳美術館の川向こうの岸には駐車場が設置されており、溪谷を愛するマニアが多いことも判った。

美術館からは川沿いに遊歩道を下流に歩くことになった。御岳橋の下を通り、途中、あゆ釣りの釣り人も多く、又グループでカヌーの水中で引っ繰り返った状態から身体を起こす訓練に励む人達、スケッチや筆で腕を動かす日曜画家の姿も沢山見受けられた。

歩道の上からちょっと下の方で水彩で描く人の絵を覗きこんだ時、まだ遠くの緑色の木々の色が変わっていないのに、その色彩を少し黄色で描いているのも見かけた。紅葉には未だ早く、下りの狭い遊歩道も余り人の行き来が多くなく、御岳美術館から約50分で楓橋の袂の「ままごと屋」まで歩く事ができた。

お食事は地元の清酒・澤乃井直営「ままごと屋」の溪流が良く見える新館・楓橋の大広間にて、蔵元だけで飲めるお酒で豆腐・ゆば料理を楽しみ、参加者全員が満足して現地解散した。

晴天に恵まれ、都心の新宿駅から約1時間半の場所に、この様に軽装の散歩気分で溪谷美を楽しめる場所があったのが驚きであった。(俣野善彦記)

(注 「ままごと屋」 ☎0428-78-9523)

## 「絵を描く会 - 奥多摩」

2006年11月3日(祝)

幹事 藤盛 富美子

「絵を描く会」参加者5名が「紅葉狩りの会」の日に、玉堂美術館の近くで絵を描きました。

玉堂美術館の周りは絵のスポットが沢山あり、日曜画家たちで賑わっていました。川合玉堂の数々の素晴らしいデッサンを見た直後だったので、“よしやるぞ”という気迫が皆に感じられました。

さて風景を描くには先ず場所を決めることから始まります。時間の制限があるので思う存分探し歩けないのが残念！切り取りたい構図が余りにもありすぎて困るくらいでした。四季折々に訪れたらそれぞれ違った趣の奥多摩の風景に出会えるに違いありません。場所が決まったら絵を描くプロセスに酔いしれましょう。

次回をもっと大勢のご参加を期待いたします。20年ほど前、私が初めて絵をやろうと思ったときに家人(?)が“向いてないよ、無駄だと思うよ”と言ったことで、やることを決心しました。自分の感動のままに、規則などにこだわらずにおおらかに表現すればよいという思いで楽しんでいます。脚や腰が弱くであろう老後も、一人で出来ることの趣味のひとつと思います。

次回の写生会はボストン会「お花見の会」の日です。一緒に描きませんか？



玉堂美術館前



「ままごと屋」新館・楓橋の大広間



## 戦後初のボストン大学 留学生

三好 彰

日本ボストン会のホームページで留学生の記録を紹介しているが、その記事を「偶然に見つけて自分の名前がでているのに驚きました。」と言って道明栄爾氏(元丸紅勤務)から電子メールが届いた。そして留学時代のお仲間について貴重な情報を教えていただいた。

早速、氏の自筆と思える署名の出ているページのコピーをお届けした。それは1951年11月10日にエドウィン・ライシャワー博士が日本人留学生のために行った講演に出席した人の名簿である。

この時の演題はThe Problem of the Post-Treaty Japan である。現在では歴史上の話題だが、当時はホット・トピックスだった訳である。博士がどのような話をされたのか大いなる興味を抱く。

折り返し道明氏から「随分懐かしい名前がそろって見ていただけ若き日を思い出し興奮いたします。自分の名前ですが、確かに自署です。今と字体が変わっていないのに驚きました。」という書き出しの電子メールが届いた。氏は当時、日記風のメモをつけておられたそうです。それには、「7時からハーバードのPhillip Brook House で日本会があり、出席。Prof. Reishauer の話しがあった。」と書いてあり、ついで現在手許にあるボストン日本人学生会の記録を見たことを「前の方には浅野良三氏宅で集まったと書いてあり、後の方には都留重人先生や名取順一氏の名があった。」と書いているという。尚「山本五十六」(筆者は山本五十六元帥閣下と記述)など著名人の署名を見たことも覚えておられた。

なおこの講演会には本会・会員の小林規威先生も出ておられたのが名簿で確認できるのだが、道明氏は「小林規威先生が当時ハーバードにいらっしたことは知りませんでした。私が丸紅のバンクーバー支店長をしていた1975年2月にUniv. of British Columbia の主催で“*Our Japanese Future*”という講演会があり、その中で小林先生が“*What is Japan Incorporated*”という講演をなさいました。その内容といい、英語といい、素晴らしいのに驚嘆しました。日本の商社についてバンクーバー在住の商社の誰かが、話をするように言われていたのですが、誰もやりたがらず、結局私が大役をおしつけられてまして、“*The Global success and aspirations of the*

*trading companies*”という題で話をしました。そういう事情で、それ以来小林先生のお名前は忘れられません。」という貴重なお話をお知らせ頂戴いたしました。

道明氏から教えていただいた留学時代のお仲間は次の通りである。

- 碧海美代子 元共立女子大学教授  
ご主人の純一氏もハーバード大学への留学生、法哲学者、東大名誉教授。
- Sakayama, William 二世帰還兵。  
Sakayama夫人のMaryさんも二世であり、ペギー・葉山さんの幼稚園時代の先生。
- 関戸弘蔵、元安田火災、日本損害保険協会、死亡ガリオア資金による留学生。
- 高山利勝 元公認会計士、死亡、ガリオア資金による留学生。
- 本田正一、元山一証券、死亡、ガリオア資金による留学生。
- 大谷光紹、浄土真宗東本願寺派法主。
- 鈴木 Albert 一郎、元青山学院大学講師。
- 萩谷納、桐朋学園教授、ボストン・シンホニー・ホールで「冬の旅」を熱唱。
- 丹呉次光、日本航空。
- 大溝久雄、丸紅株式会社。
- 岩村信二、牧師。
- 大谷喜明、社会事業家、東京経済大学・短期大学部長。
- 田下優、大阪女子大学教授。

ところでこの講演会の英文で書かれた案内状が残っている。今では懐かしい青焼きのコピーであるが、責任者としてサインしているのは Albert Ichiro Suzuki (日系人、鈴木一郎)氏である。日系人らしい見事な英文である。

道明氏によると鈴木氏は萩谷氏とシンホニー・ホールのそばのアパートで共同生活をしていたという。そして料理上手な二人の世話になったことを懐かしく思い出したという。道明氏はこの二人を交えて日本人学生会の集まりで合唱したことがあり、そのときの写真を大事にしているとのことである。

なおこのアパートには戦前から日本人留学生が入れ替わり立ち代わり住んでいたのが分かっている。戦前に住んだ人は南京虫に悩まされたというが、DDTが解消してくれたことだろう。このアパートは現存するそうである。

## ボストン日本人学生会 (Ⅱ)

### 三好 彰

今回は、ボストン日本人学生会が活動を開始した明治41学年度か大正2学年度までを概括した。

今回はこの期間における学生の状況と日本からの来訪者について記す。

日系人を含む日本人は47人出てくるが、消息のつかめない人が12人居る。何分百年も前のことなのだから追跡は難しい。なお、不思議なことだが女子留学生が見当たらない。

判明した範囲で7割がハーバード大学で学んでおり、1割がMIT(当時はボストン・テックと称した)である。このほかにMITと同数の人が神学校生だったのが興味深い。なお、文系と理系の比率はほぼ同じである。留学生の選考にあたり偏りを避けたと受け取られる。

卒業後に活躍した分野を見ると、官界、学会よりは実業界(産業界、聖職者)の方が多い。これはアメリカが実業を重んじてきたことの証しであろう。もっとも明治維新直後はアメリカへの留学が多かったが、明治の半ば以降になると当時学問で世界をリードしていたドイツへの留学が増えたことが背景にあるのかもしれない。

さて、日本から来訪者が来ると、他に対応機関がなかったせいだろうが、ボストン日本人学生会に話が持ち込まれている。

男爵・高平小五郎(外交官、ポーツマス講和会議出席、1908年駐米大使、貴族院議員)、男爵・菊地大麓(東大総長・文相・京大総長を歴任、1909年学長)、新渡戸稲造(ジョンズ・ホプキンス大卒、1911年に初の日米交換教授としてアメリカ各地で講義、後年に国際連盟事務次長)、および子爵・金子堅太郎(ハーバード大卒、司法大臣・枢密顧問官などを歴任、1910年米国訪問)という歴史に名を残す大人物の訪問を受けている。

なお当時の米国大統領セオドア・ルーズベルトは金子のハーバード大での学友であり、新渡戸の著書「武士道」を氏に紹介したことはよく知られている。

後年、各界で活躍したとはいえ、留学生だった若きエリートは、これらの大人物の対応に困惑したことだろう。それを裏書きするかのように来訪の準備をする記事はあるが、具体的な対応内容については記されていない。

なお、現地に滞在する留学生に来訪者の対応をさせるのは、古くて新しいテーマと考えてしまう。

読後感想 増淵興一著

## 「世界に羽ばたけ！若人よ」

昨年末、MITの終身待遇名誉教授としてご高名な増淵興一先生から当会にご著書\*の献本がなされ、回覧によりこれを読ませて頂いた。

読み終えた感想を一言で表現すれば、「さわやかさ」に尽きる。大正13年(1924)1月に北海道小樽市でお生まれになった先生は、若き学徒として溶接理論を専門分野に選び、以降、半世紀にわたりその研究に邁進され、数々の成果を挙げて国際的に高い評価を得ることになった。人生の大きな節目では、すべて自己責任と独立自尊の気持ちで進路を決定され、生き抜いてこられた。

あとがきにもあるように「“知・誠”と“和”を正面に掲げ」、高い志をもって研鑽を積み重ねて人生を歩んでこられたお人柄から、そうした爽やかさが醸し出されているのではないかと感じた。まさに北海道にゆかりのクラーク博士が学生達に残した“Boys, be ambitious!”の精神を地で行ったかのような人生だと思った。

若い頃からご自分の研究成果を英文にまとめては、国際的な学会誌に投稿されるなど、「井の中の蛙」とは対照的に、常に視野を広く世界に向けておられたことが判る。1960年代以降、米国に居を構えて研究生生活を始められてからの、様々なご苦労のエピソードも興味深かった。例えば、学会や人前で発表することが決まれば、いかんともし難い語学力のハンデを少しでも埋めようと、時間の許す限り、何度も何度も推敲を重ね、予想質問に備え、英語のプレゼンのリハーサルを繰り返されたという。チャレンジに直面する度に、いつでも真真正面から正攻法で取り組むお人柄が伝わってくる。

それに比べて、昨今の若い日本人研究者が国際学会等で発表する際の態度など極めて安易で、周到な準備をしたのか疑問に思う、と苦言を呈しておられる。今日の日本社会が全般に浮わっている証左かもしれない。

ご著書の後半に、日本からMITに留学して「増淵教室」で薫陶を受けた方々との座談記録が収録されている。後輩諸氏が「他の誰もやっていないこと」、「自分の専門分野とは異なるテーマ」に挑戦し、研究者としての新境地を切り拓くよう、先生に励まされた様子が伝わってくる。これからも「国際的メンター」として、益々のご活躍を！(棚橋征一記)

(\* 出版社：成山堂書店、2006年11月、¥2,000)

歴史を飲もう会(平成18年12月9日)

## “江戸情緒を尋ね 日本橋界限を歩く”

篠崎 史朗

日本橋の橋名の起源には、諸説ある中で、「この橋の川下には江戸橋があり、又京都に向かった銀座口には京橋があったので、江戸でも京都でもない日本の中心の橋と言うところから生まれた呼称だ」との説に最も説得力があるよう思える。現在、橋畔に立った記念碑も「徳川盛時ニ於ケル本橋付近ハ富賈豪商ヲ連ネ魚市アリ酒庫アリ雑鬧沸クガ如ク橋上貴賤の来往昼夜絶エズ」と、江戸開府以来日本の中心としてのこの橋の存在を形容している。

今回の企画はこの日本橋界限を歩く趣向で、“江戸情緒を尋ね”と大見得を切ったが、幾世紀を経て江戸や明治の面影が今にあらう筈もなく、所詮は想像力逞しく歴史書を読むように歩くこと以外にはないと承知しなければならない。

しかも歩く範囲もわずかであった。本石町一丁目の貨幣博物館を起点に日本橋川沿いに旧按針町の脇を江戸橋・人形町方面へ進み、小舟町の先を堀留町の方へと北上し、大伝馬町・小伝馬町を巡ったあと、本町四丁目へと向きを変え、室町三丁目を経て三越前に戻ると言う日本橋北部の申し訳ない程の狭い範囲でしかなかったのである。参加者の方々も恐らくそのように思ったに違いない。

然し、詳細な説明を省くとして、この界限こそが多数の間屋を中心に、職人町、魚河岸を含む一大商業ゾーンとして、永く江戸の繁栄を支えた中心地域だったのであり、今回は紛れもなくその地域を歩いたのである。

何故この地が栄えることになったのか。それは豊かな水辺と言う天の恵みがあったためである。江戸時代の初期頃、この地にはあちこちに海が入り込み、川が注ぎ、その後幕府が戦略的な埋立工事などを行い縦横に堀も造られて水路が発達し、これがこの地に繁栄をもたらすことになった。最早、町名にしか名残りが無いが、現在の小舟町・堀留町には日本橋川から東西二本の堀川があって、そこには全国各地から江戸向の荷を積んだ多数の荷舟が集まり、兩岸には各間屋の倉が並び、年がら年中商人や船頭、荷揚人足などでごった返していた。人で賑わえば、それ目当ての新しい商売が生まれ、町は発展し、更に人と呼ばれ、やがて花柳の巷が出現してそこにある種の気分が醸成されることになる。

これにすぐ近くの川のほとりに形成された魚河岸を発祥の地とする“いなせ”(勇み肌の人々が番を鯉の背の形に結んだ)の気風が重なり、時を経て次第に多数の共感を誘うこの地独特の情緒へと昇華して行った。所謂江戸情緒の誕生である。

この不思議な情緒に惹かれたのは無論一般市民だけではなかった。時代は明治・大正となるが、この地の雰囲気は強く魅せられた文人たちも現れた。

大正初期の作である泉鏡花の「日本橋」は、現在の貨幣博物館近くの日本橋川西河岸を舞台とした小説だが、劇化され新派の芝居として演じられて好評を博し、それで日本橋が一層有名になったといわれている。

然し今回歩いた日本橋北部となると、何よりも明治末期の若き詩人・画家の芸術談話会であった「パンの会」であろう。木下杢太郎、北原白秋、吉井勇・石井柏亭らを中心とするこの会の集合場所はつねに日本橋川ほとり、又はその周辺の西洋料理店などであった。ヨーロッパもフランスに強烈な憧憬を抱いた当時の彼らは、廣重の大川端の絵に感動したヨーロッパ人の感覚をもって水辺の下町を眺めようとしたのであろう。

日が落れば河風の肌に冷く  
あれ江戸橋に燈がついた。緑の燈がついた。  
瓦斯の燈さえもゆらゆらと・・・  
流れる水にゆらるるものを・・・  
いたいけな声して、  
魚河岸の窓から漏るゝ  
稽古の三味の梅の春さえ  
塀をはずれてほのぼのと  
遠き川口の汽笛の音さへ  
秋となればさびしきものを・・・  
えんやさの これわいさの よいやな。  
(木下杢太郎詩集「食後の唄」より)

もう一人谷崎潤一郎がいる。彼は明治10年代、現在の人形町一丁目の生まれであった。自ら述懐するようにこの下町に一人の町人の子として生まれ、その時代の種々の文化や風俗習慣の下に生まれ、それを土台として、文豪と言われるまでの小説家になったのである。

更に付け加えれば、日本近代文学史に大きな足跡を残す同人文芸雑誌「文学界」を島崎藤村、北村透谷らと創刊し育成した星野天知や、この「文学界」の同人でもあった英文学者・随筆家の平田禿木がいる。彼らはいずれもこの地の商家出身であった。

(9頁につづく・・・)

ボストン美術館

## 「江戸の誘惑」展

紅葉が明るさを増す頃、江戸文化の素晴らしさを改めて認識する機会を得た。昨年10月21日から50日間、当会員の小林淳一氏が学芸課長を務める江戸東京博物館で開催されていた、ボストン美術館所蔵の肉筆浮世絵展「江戸の誘惑」のことである。

かのウィリアム・ビゲローは、フェノロサの指導のもとで蒐集した江戸時代の版画3万点以上とともに、絵画も約4千点をボストン美術館に寄付している。その中で、江戸時代の浮世絵作家を代表する菱川師宣、葛飾北斎、喜多川歌麿などの手による二つとない肉筆画は700点以上にも及び、そのうちの80点ほどがこのたび里帰りした。(別項参照)

古いものが否定され、日本独自の伝統文化と芸術も排斥されて、江戸時代の美術品が二東三文で入手できた明治時代ではあるが、また大富豪とはいえ、よくこれだけ買い集めたもので、あまりにも膨大であるがために、1996年までは殆ど手つかずで同美術館に保存されていた。

日本からの調査団は、そうした多数の名品と大作を目の当たりにして信じがたい面持ちであったという。それにより、ボストン美術館は、日本の版画と肉筆画のコレクションにかけて質量ともに世界一と認められている。今回の江戸博での展示の多くは遊里や遊山の世界を描いたもの、そして美人画であるが、木版では表現することのできない、江戸時代の武士を含めた町人の生き活きた生活が写實的に描かれている。当時のおおらかな町民文化を、視覚的に実によく知ることができた。

日本のみならず世界の近世までの歴史を通じて、特に元禄時代を中心とした江戸市民ほど生活をエンジョイしていた例は稀有であろう。貧しくても江戸では長屋の大家が面倒を見てくれ、また隣人がお互いに支えあっていたので、常におおらかでいられた。

その中でエドワード・モースを始め、江戸末期から明治の黎明期に訪れた多くの外国人を感動させた固有の庶民文化が育ったのである。

また細い筆先で着物の柄が精緻に描かれており、その時代でも最も最先端を行くようなセンス豊かな、あるいは大胆なデザインの素晴らしさ。中国や西洋の影響を受けることなく、日本独自に培われた見事なセンスが具現されたものだ。そのような洗練されたデザインを生んだ文化的背景も、この展示から読み取れる。見る人の知的ベースを豊かにする里帰り展であった。(関 直彦記)

## 主要展示品(音声ガイド・プログラムより紹介)

### 第一章 江戸の四季

- ①朱鍾植図絵(1805)頃 葛飾北斎
- ②春遊柳蔭屏風(1789~1801)頃 勝川春章
- ③向島行楽図(天明後期~寛政前期) 歌川豊春
- ④柳下美人図(1785)頃 鳥居清長
- ⑤鏡面美人図(1805)頃 葛飾北斎
- ⑥隅田河畔春遊図(1764~1772)頃 鈴木春信

### 第二章 浮世の華

- ⑦芝居町・遊里図屏風(1684/1704)頃 菱川師宣
- ⑧ ” ” (六曲一双) ”
- ⑨雪月花園(1789~1801) 歌川春信
- ⑩吉原風俗図屏風(宝永~享保) 無款(宮川長春)
- ⑪芸妓と仲居(1804~1818) 末頃 歌川豊国
- ⑫遊女と禿図(1789~1801) 喜多川歌麿
- ⑬画卷「象の綱」(1804~1818) 鳥文斎栄之
- ⑭鳳凰図屏風(1835) (八曲一隻) 葛飾北斎
- ⑮唐獅子図(1844) ”

### 第三章 歌舞伎礼賛

- ⑯絵看板 錦木栄小町(1758) 無款(鳥居派)
- ⑰三代目中村歌右衛門(1812) 歌川豊国
- ⑱石橋図(1787、1788) 掛幅一幅 勝川春章
- ⑲三味線を弾く美人図(1804~1806) 喜多川歌麿

### 第四章 古典への憧れ

- ⑳見立石橋・見立江口図(1716/1736) 竹田春信
- ㉑見立羅生門・見立小倉山図屏風(1716/1736)  
二曲一隻 奥村政信
- ㉒提灯絵 龍虎・龍蛇(1804/1818) 頃  
無款(葛飾北斎)
- ㉓百鬼夜行図絵(1772~1781) 鳥山石燕
- ㉔玄宗楊貴妃遊楽図(天明末~寛政初期) 窪俊満
- ㉕見立江口の君図(1785、1786) 頃 勝川春章

### “江戸情緒を尋ね 日本橋界隈を歩く”(続)

これらは今回歩いた界隈の歴史の一部だが、現在その痕跡はすっかり消えてなくなっている。街は大小のビルと、その間で押しつぶされそうな商店とで埋まり、殺風景この上もない下町である。

街は時代と共に変わるものである。今、地下鉄三越前駅への地下道の壁に、往時の街の様子スケッチ画がいく葉か展示されているが、脇に附された挨拶文にはこう記されている — 江戸開府以来400年にわたって橋と共に歩んできた日本橋は、いままた、そのまちの姿を大きく変えようとしている — と。果たしてどのように変わってゆくだろうか。

参加者14名。会食は蕎麦屋「利休庵」にて開催。

## 秋の美術の会

三好美智子

秋晴れの10月21日(土)午後3時、参加者8人(酒井幹事夫妻、俣野夫妻、山崎夫妻、篠崎さん、西川さん)が、JR上野駅(公園口)前の国立西洋美術館の前庭にあるロダン作“地獄の門”前に集まって秋の美術の会の行事“国立西洋美術館の常設展を鑑賞する”を始めた。

この二年半ばかり、当館でボランティアとしてギャラリー・トークを担当している私が案内役を勤めた。今回は、この美術館の基礎をなしている松方幸次郎コレクションを代表する絵画と彫刻を中心に、時代を追って鑑賞することによって西洋美術の流れを見ていただきたと考えた。



初めに前庭で圧倒的な存在感のあるロダン作“カレーの市民”のところへ行き、「イギリスのエドワード3世への人質として死に直面した男たちの怖れや苦悩の表情にリアリティと迫力を持たせた」歴史的背景とロダンの創作過程のエピソードを紹介してから館内に入った。

この建物は、20世紀最も優れた建築家の一人であるフランスのル・コクビジュが設計したもので、明かりとりの窓やピロティ(美術館の入口部分にあるゆとりあるスペース)など随所に彼の特徴が見られ建築物としても貴重である。

さて館内でまず最初に見たのは16世紀前半に描かれたベルギーのフランドル地方の三連祭壇画である。西洋美術において宗教画はやはり外せないからである。祭壇画に描かれている人物の人間関係、アトリビュート(人物が誰であるかを明らかにするのに使われる象徴的な事や道具)を解説した。「描いた画家の思いや、工夫が見てとれ、宗教画が面白くなった」という意見が出てうれしくなった。

見慣れている“最後の晩餐”などの宗教画をざっと見て17世紀のコーナーに進んだ。この世紀に世界を制覇していたオランダは絵画の上でも大いに発

展していた。風景画、静物画、風俗画に画家達は腕を競いあったのだ。これらの絵画について思い思いの感想を述べあった。話は熱気を帯び、夢中になったために監視員から注意を受け、ヒヤーとすることがあった。

次に18世紀のフランス・ロココの優美な影響を残しながらも新しい時代の到来をしのばせる女性画家マリー・ガブリエル・カペの自画像をへて、いよいよボストン美術館で見慣れた印象派の画家たちの部屋に入った。ここでは何の説明も必要でなかったので、各自にお気に入りの画家の作品前で静かな時を過ごして貰った。

隣接するモネの部屋では、写真に深い造詣の深い篠崎さんを囲み、この絵は朝か夕方かと議論しながら、“雪のアルジャントゥイユ”の作品の前でしばし雪景色に見入ってしまった。

最後に現在に一番近い作品のある吹き抜けの明るい部屋で椅子に座り、ゆったりとピカソ、ミロ、エルンスト、ポロック等の抽象的な作品を楽しんだ。



そして振り出しの既にライトアップされた“地獄の門”の前で、「みな地獄行きだ」と軽口をたたきながら記念写真におさまった。既に午後5時になっていた。

世界中を飛び回り、多くの美術作品に触れてきている皆様、口々に国立西洋美術館のコレクションの充実ぶりを褒めていただき、再度訪れたいのごを頂いた。なお65歳以上なら常設展は無料である。

篠崎さんから時代により「光の扱い方」の違い、酒井夫人から「額も絵画の重要な一部であること」を教えていただくなど、知識、経験ともに豊かな皆様と作品を見たことの意義は大きく、小中高生を相手にトークしているとき得られない楽しさであった。

JR上野駅前の中華料理店“過門香”での会食では、ボストンの今と昔、エジプトからイタリアへと世界中の話題が飛び交った。そしてごく卑近なじじ、ばばへと話は尽きなかったが、午後8時にお開きとして、家路についた。

## 踊り子を描く

Edgar Degas (1834~1917)

Henri de Toulouse-Lautrec (1864~1901)

(箱根 ポーラ美術館所蔵作品から)

ドガの作品“二人の踊り子”(1900年頃)は舞台裏で腰に手を当てて右足を前に出しくつろいでいる踊り子が中央に力強く描かれている。カーテンの陰からもう一人の踊り子の姿半分が見える。モチーフを大胆に切り取った構図である。

1892年以降のドガの作品は視力の衰弱もあって、絵全体が一種独特の華やかさを帯び始める。この作品も又バックの青緑の濃淡が踊り子の着るオレンジの衣装とひびき合っておりあでやかである。のびやかな踊り子の手足は力強い線で描かれ、今にも動き出しそうである。線は単なる物体の輪郭の線でなく、動きそのものを画家は線で示そうとしている。

ロートレックは1886年頃からモンマルトルのキャバレーやサーカスによく出かける。彼にとってのこれらの場所はドガにとってのオペラ座の踊り子を描くと同じだった。ロートレック描く“楽屋の踊り子”(1886年頃)は、楽屋と言う狭い空間にある鏡に写る踊り子自身自身を入念にチェックしている彼女と手助けする女性をまるで仮面をつけた様な紳士がかたわらで静かに二人の様子を見守っている。他の多くのロートレックの作品の中にも見られる様にこの人物は画家ロートレック自身である。

青味がかかった黄色い光が踊り子の顔、付き人の顔を照らし出している。それは室内の光であり、又は人工光線である。それらの光の効果は何かしら独特の雰囲気をもたせている。ロートレックの描く線もドガ同様、線自体生命を持っていて、線の動きによって形は生き生きとした表情を示している。

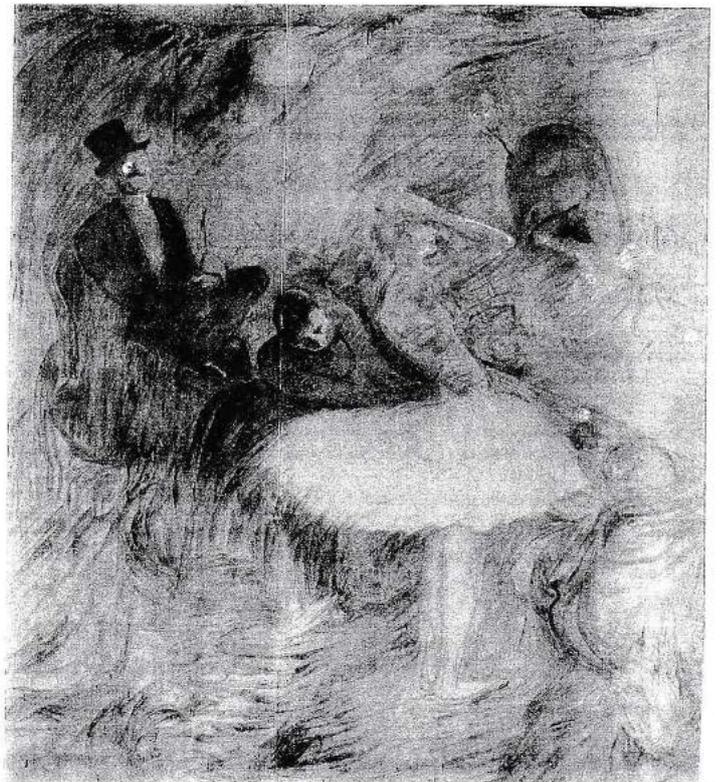
画家たちの強い眼差しによって描かれた絵、そしてその絵は多くの人々の幾重にも重なる視線を浴びる。きっかけは何であれ、Art にふれることは、人生観を変えてくれると思いませんか。

晩夏の頃と違い、昨年12月20日過ぎに訪れた箱根ポーラ美術館は、観光客も少なく、「ドガ、ダリ、シャガールのバレエ — 美術の身体表現」展をのんびり鑑賞することができた。(3月18日迄)

(美術の会 酒井典子)



Edgar Degas, Two Dancers (1900頃)



Henri de Toulouse-Lautrec,  
Dancers in Her Dressing Room (1885頃)

## 日本ボストン会2006年度総会報告

日時: 2006年11月7日(火)午後6時30分～9時

場所: NEC三田ハウス芝クラブ

議事 会長挨拶、会員紹介、次期会長選任・挨拶、  
会計報告、活動報告。

出席者: 38名

\*遠隔地参加者

(ボストン) 吉野耕一夫妻、バーンズ郁子、

(京都) ジャメンツ登三子。

\*新会員紹介: 井上恵美子、大野夫人、長島雅則

\*\*\*\*\*

日本ボストン会2006年度総会は、近藤宣之副  
会長の司会で定刻に開会いたしました。

まず佐々木浩二会長から、遠路ご参加をいただいた吉野耕一先生ご夫妻、バーンズ郁子さん、それから茂木賢三郎前会長、ご参加の皆様への謝意表明があり、過去1年間を回顧し、日本人留学生の記録の調査、ボストン出張時(4月)に増淵先生、ボストン日本人会の中司副会長との会合、京都ボストン交流の会総会(6月)への参加をあげられ、会員増加に余り成果を上げられなかったが、次期会長(ハーバードご出身)、次々期会長(BU出身)にお願いし会員を増やしたいのご挨拶をいただきました。

ついで乾杯は、茂木賢三郎顧問から、本日の楽しいイベントに参加し、今年で79歳の山田敬蔵氏が今でも毎日走っておられると知り、会の今後の益々の発展と会員のご健勝を願っているのご挨拶をいただき、恒例の懇親の場に移りました。

雰囲気盛り上がり、新会員のご紹介に移りました。

井上恵美子さんが母校の同窓会の場で森啓氏からこの会を知り、3か月間、ボストンの英語学校に留学したご縁で入会したと自己紹介されました。

大野スキ子さんはご夫妻で入会されましたが、奥様だけのご参加になりました。ご主人は分子生物学の研究者で、ご本人はアート・ギャラリーを運営、バーンズ郁子さんのお知り合いとのことでした。

長島雅則氏は佐々木会長がMIT 同窓会の次期会長をお願いした縁で、入会されたとのことでした。建築関係でMIT・英国ケンブリッジに留学、CADシステムの関連企業を創業されたとのことでした。

ボストンからご参加いただいた吉野先生ご夫妻からは、今回、黒部、佐渡が島まで旅行してきたが、総会が一週間余繰り上げられなかったら、参加出来なかったとご挨拶をいただきました。

バーンズ郁子さんからは、久しぶりの邦画をみて楽しんでいるのご挨拶をいただきました。

この後、総会議事に移り、佐々木会長が今年から2年間の次期会長に鶴正登氏(NOK会長兼社長)を推薦され、拍手で承認されました。さらに次々期会長(2008年から2年間に山村章氏(株)フェロテック社長)を推薦されご承認をいただきました。この後、鶴新会長からハーバード・ビジネス・スクール同窓会の前々会長でおられた茂木賢三郎顧問のご推薦で会長を引受けることになりましたが、これから2年間、各同好会の皆様のご協力を得たいのご挨拶をいただきました。留学中の縁でニューイングランド・ペイトリオットの大ファンで、TVでゲームを見ているとのことでした。

この後、各同好会の活動状況が報告された。

\*会報: 年2回(3月、10月)発行、俣野幹事。

\*会計: 山崎規矩子幹事から第14年度(2005年9月～2006年8月)の決算報告を受けて、出席者のご承認をいただいた。

収入 1,446,689 円(含前年度繰越金)

支出 269,029 円

残高 1,177,660 円(次年度繰越金)

特別会計 442,040 円(含ガイドブック在庫分)

資産総額 1,619,700 円

\*ガイドブック頒布報告: 近藤百合子幹事。

\*ゴルフの会: 10月6日のコンペは、当日の悪天候のために、ゴルフ場到着後にグリーン閉鎖が決定され、中止された旨、山崎恒幹事から報告。

\*観桜会: 千鳥が淵、4月1日開催、39名出席。

来年も千鳥が淵で開催したい。生田幹事。

\*紅葉狩り: 11月3日、多摩川の上流、みたけ渓谷の秋を楽しんだ旨、藤盛紀明幹事から報告。

\*歴史を飲もう会: 12月に日本橋界隈を探訪する計画を報告。篠崎幹事。

\*音楽の会: ホームコンサート開催、30人参加。関幹事。

\*日本人学生会の調査状況報告: 三好彰幹事。

尚、ボストンからご参加の吉野先生から、1950年以前の資料は総領事館にお渡ししたので、何もない旨のご報告があった。

\*京都ボストン交流の会報告: ジャメンツ登三子さん

\*美術の会: 茂木賢三郎顧問が野田市に作られた茂木本家美術館の初代理事長に就任された旨報告があった。酒井一郎幹事。

\*山田敬蔵氏から近況報告をいただいた。

最後は藤盛副会長の一本締めのご発声で閉会した。

幹事会記録:

日時: 2007年1月24日午後6時半～9時

場所: 新宿サミットクラブ、20名出席。

(俣野善彦記)